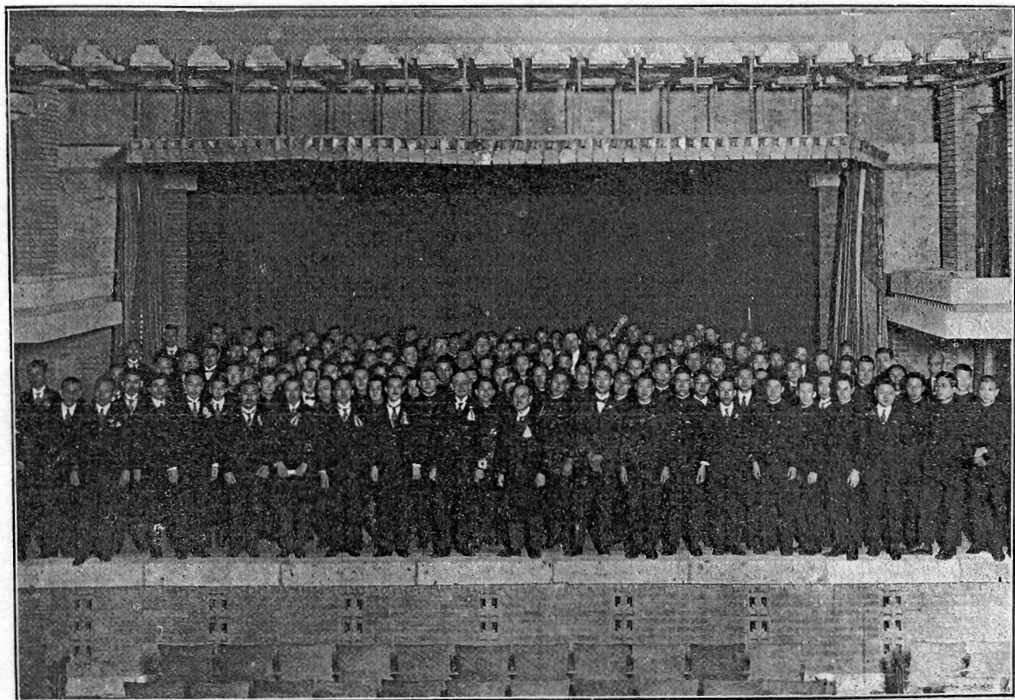
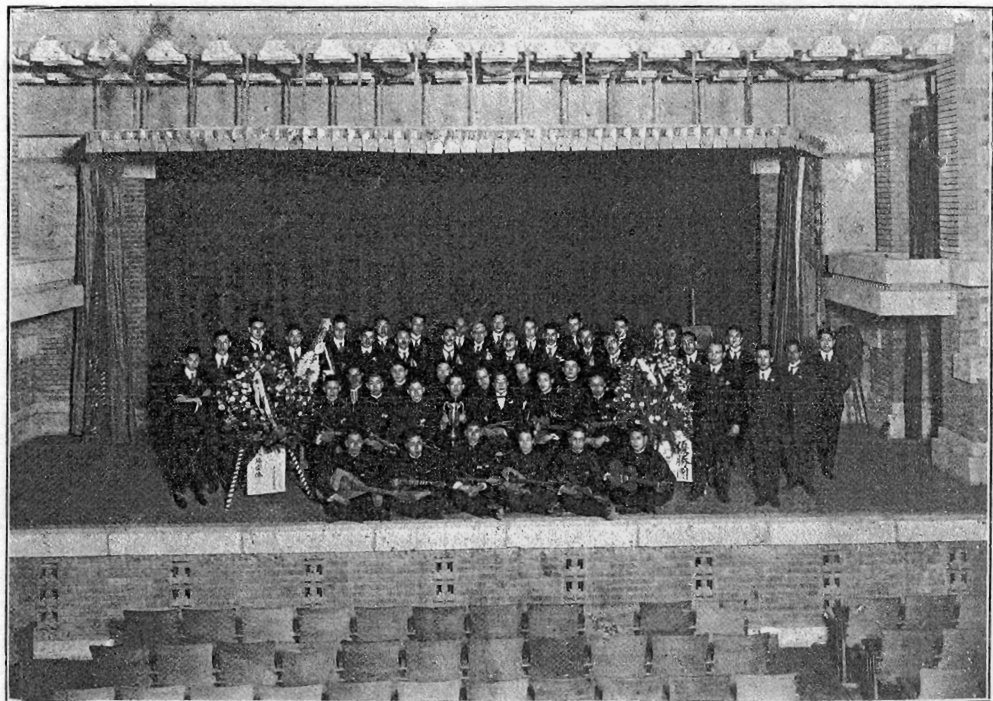


本邦斯界過去現在



第一回全國マンドリン合奏團競演會(大正十二年一月)主催者側と參加全員



第一回競演會の優勝團、同志社大學マンドリンクラブ(座せるもの)と
主催者たる本オーケストラ(立てるもの)

一、本邦にマンドリン、ギターの入りたる時機

本邦に初めてマンドリンやギターが入つた時機については明確に之を知る材料がない。或は三十餘年前に四籠訥治氏がマンドリンを弾いて居たと云はれ、或は又それより前仙臺に宣教師として滞在した外國人が此樂器を携へて來たと云はれて明瞭でない。

一體今日のナポリ風マンドリンがバスクワートレ・ヴィナツチアによつて完成されたのは千八百五十年頃の事であつて我嘉永年間である。そして完成はされたもの、此新らしいマンドリンが古い諸種のマンドリンを壓倒して一般的に用ひられる様になる迄には勿論相當の時日を要したのであつて、それが更に本邦に迄齎らされる迄に一層長い月日が経過する事は推察に難くない。従つて如何に考察しても西曆千八百八十年より前にマンドリンが本邦に入ると云ふ事は先づあり得ないのである。千八百八十年と云へば我明治十三年である。

最近に起つた事であるが京都宇治に醫業をして居た或舊家から一つのマンドリンが賣立てられた。此マンドリンは轉々して四條通りの古道具屋に現はれ、幸に私の手に入つたが此マンドリンは獨逸人の手工であつて古いナポリ風マンドリンである。(挿繪參照)

此マンドリンについて古い所持者である宇治の舊家を調べたいと思つたがそれは全く不可能であつた。然し此マンドリンの製作が如何に新らしく考證しても千八百八十年以後とは云へない。非常に古典的な今は見られない糸巻や、全體の形狀等はナポリ風の新しいマンドリンが歐洲の全體に擴がつて行つた後の作とは想像出來ないのである。

之を要するに此樂器が本邦に齎されたのは千八百八十五六年であつて我明治十九年の頃と思はれる。果して然りとすれば恐らくは日本に此樂器が齎された最初のものではないかと考へる。

話は逆行するが四竈訥治氏について其弟君である四竈海軍少將が侍從武官府に居られた時私は種々談話を交換したのであつたが、要するに訥治氏は非常な音樂好で各種の樂器を奏せられたと云ふ以外に明瞭な事は判らなかつた。然し同氏がマンドリンを奏された事は事實であつてそれが明治二十七八年頃の事であるから本邦の奏者としては最初の一人であると云ふ事が認められる。

明治二十七年米國東海岸に於ける最初のマンドリニストであるサミュエル・アデルスタインが本邦に來遊し、横濱に演奏會を開いたが、何等の刺戟をも與へなかつた。それは當時の日本としては當然の事であつた。彼は我三味線や琵琶を携へて米國に歸つた。

以上は個人的運動に外ならないが、扱本邦に於て最初にマンドリン教授を初めた人は誰かと云へば私は比留間賢八氏を推すに躊躇しない。同氏が獨學でマンドリンの研究を始めたのは明治三十二年頃の事で其動機は進歩した洋樂を日本一般の家庭

に擴めたいと云ふ希望から此樂器が最も適當である事を認めたと云ふ事である。翌三十三年氏は渡歐し獨逸伯林に滞在中同地のマンドリンギター教師アルタイ・エレ・コルナーナイ (Article Cornati) と云ふ伊太利人に就いて教授を受け、歸途同氏の紹介で各地の斯界を視察の後明治三十四年六月歸朝、茲に本邦最初のマンドリン教授に従事したのである。

比留間氏は又一方米國のマンドリニスト、サミエエル・シーゲルの通信教授に加入して其一定の業を修めた事がシーゲル通信教授人名簿に載つて居る。

比留間氏は其後教則本を著はしたり稀に演奏會にも現はれたが元來氏の使命はマンドリン教授にあるので其後目覺ましい發展をされなかつた事は何等不思議でない。

氏の齎された奏法が今日の用として不適當であり又氏の滞歐中の見學研究が彼地斯界の核心に觸れなかつた恨みありとするも尙氏が本邦斯界の先覺者たる名譽は史

上を飾るものである。

ギターが本邦に入つたのは決して新らしい事であるまいと思ふ。鐵道界の恩人であり又平岡大盡の名を以て知られた平岡熙氏が米國留學中にギターを學んで歸朝後も之を奏せられたが、少くとも四十年以上の昔の事である。之は偶々私の知つた事實であるが此外にも隠れた事實は幾らもあらうし又ギターがマンドリンと異つて近い過去に生れたものでないので明治の初年頃に外國船の船員等が携へ來つた事も想像される。

然しギターが一般的に知られる様に成つたのは極めて近年の事であつて又サルコリ氏に負ふところが多いのである。(尤も二十年程以前に或外國人が横濱でギターの獨奏會を開いたと云ふ事が或人によつて傳へられて居る。)

私達の理想から云へば今日も尙搖籃期であると云ふべきであらうが假に明治の末年から大正七年迄を搖籃期と名づける。蓋し一般愛好家は此區分を最も適當と御考へに成るであらう。何となれば尠くとも今日の斯界は世界に於て一二を争ふ勢力を確保して居るからである。

形式は兎に角として團體的にマンドリンやギターを奏したものである。私は美術學校の有志から成つた集りを先づ挙げたい。南薰三氏や岩村氏等が中心となり比留間の肝入の下に成つたと云ふ事を耳にして居る。勿論樂器編成や曲目は幼稚なものであつたが而も今日の本邦マンドリンオーケストラの基をなしたと云つてよい。

美術學校に次いで起つたものとしては當然慶應マンドリン俱樂部を挙げなければ成らない。今日の合奏團中最も古い歴史をもつものが同團であると云ふ事は何人もよく首肯する處であらう。同團に於て其中心となつた人は田中常彦氏(今日の澤氏)

であつて當時は學生であつた。

此他にも學生を中心として合奏を行つたものは二三あつた様であるが明瞭には記録に残つて居ない。

明治四十四年伊太利の聲樂家として來朝したアドルフ・サルコリ氏は一面に於てマンドリンギターの奏者であり、作曲家でもあり且伊太利の斯界に比較的深く踏込んで居た關係上、本邦漸界の爲に著しい刺戟を與へた。氏は田中氏や慶應マンドリン俱樂部と結んで屢々演奏會を開いた。勿論其曲目なり編成なりは今日から見れば誠に幼稚不徹底なものではあつたが而も邦人は初めてマンドリン合奏の眞價を認めるに到つたのである。

慶應マンドリン俱樂部の異名同身とも云ふべき東京マンドリン俱樂部が田中氏の手によつて設けられた。慶應の新舊學生が集まつたものである。

サルコリ氏は吾々にマンドリン合奏の外形を傳へマンドリンやギターの奏法に立

派なヒントを授けたのであつて氏の功績は甚だ大きいものである。同時に田中氏が殆んど獨力でマンドリン獨奏を研究し、ムニエルの西班牙風狂想曲等を演奏してオリヂナルなマンドリン曲の存在を知らしめた努力は以て偉としなければ成らない。

主なる運動として大正二年十月三十日帝國ホテルに於けるヴェルディ百年祭紀念音樂會（サルコリ氏、田中氏を初め數名の日本人と横濱の外人が合同してマンドリン合奏を行ふ）大正四年六月音樂普及會の企てた音樂會、同七月三日慶應マンドリン俱樂部主催、東京、横濱、慶應三俱樂部合同演奏會、同十一月十四日精養軒に於ける御大典奉祝音樂會（慶應出演）等が擧げられる。之より曩き大正二年九月にはサルコリ氏がヅブラウキツチ氏、パウロウスキー氏等と共に關西地方に演奏旅行を企てたが此時東京マンドリン俱樂部から田中氏、佐藤信忠氏、間野真太郎氏を伴つてマンドリン四部合奏を曲目に加へた。此クワルテットは大阪、神戸、京都、名古屋

の各市に於て音樂愛好家に可成深い刺戟を與へたと思ふ。

ギター獨奏を初めて公にした邦人は關根文三氏である。大正四年六月音樂普及會の音樂會に於てサルコリ氏の曲を演奏したのである。

大正四年末に於て私と田中氏とはシンフォニア、マンドリニ、オルケストラを創立し、小やかな合奏を初めた。そして其翌年の六月から年二回の試演會を行つた。そして翌六年の五月迄を家庭で内輪に開き、十一月からは生命保險協會のステージに出たのである。

大正五年頃に於ける合奏團體として記憶に残つて居るものは以上の外、横濱にイーストレーキ氏の横濱マンドリンソサエティー、前橋に萩原朔太郎氏のマエバシマンドリン俱樂部があつた。

之より曩き私は斯界の爲に音樂雜誌を發行する事を企劃し大正五年四月初めて「マンドリンとギター」を創刊した。勿論當時は希望者に無代頒布を行つて居たので

ある。慶應マンドリン倶楽部の演奏會の批評を掲げて同倶楽部の一員との間に論戦を戦はせたのも五年秋の事であつた。

丁度此頃までが米國斯界の黄金期で私達はシーゲル、ブレイス、アプト等の名手のレコードを手に入れて異常な昂奮を覺へたものである。

大正六年三月迄の一年間を無代頒布によつた雑誌も希望者が續出するのと又一面には無代で貰へると云ふ事の爲に必要を感じない路傍の人が之を請求すると云ふ様な弊害が起つたので四月から公に發賣する事になつた。

オルケストラが演奏會に發表した曲目は勿論平易なものであるが、田中氏はマンドリン獨奏、私はギター獨奏に只管努力をつゞけたものである。

搖籃期の主なる出來事としてはサルコリ氏の奮闘、田中氏の努力、「マンドリンとギター」の發刊を擧げるの要がある。手前味噌で恐れ入るがマンドリンギター界の急速の進歩發達は明に此小刊子の導きが大部分の功を負ふ事を自ら深く信じて居る。

三、勃興期

大正七年に入つて本邦斯界は著しい進歩發達を示す様に成つた。

シンフォニアは六月の第五回演奏會にファンタウツツイの「黎明」、ブラツコの小交響樂「マンドリンの群」を以て本邦に初めて獨創的價値ある合奏曲を公にした。此時以後シンフォニアは引續いて獨創曲を曲目にのせたのである。而も新興のクレツシエンドマンドリンオーケストラは第一回試演會を開きムニエルの「ネリーアルバム」に新味を加へた。同オーケストラは之より大正十一年頃まで引續き努力をなしたが十一年以降に於て沈黙に陥つたのは如何にも残念である。

慶應は二三年來不振時代をつゞけて居たが七年秋グラツィアーニ・ワルテルの「西班牙風組曲」ゾットの「樂しき紀念祭」に再び擡頭し之より今日迄不斷の研究をつ

よけて居る。

此頃に存在した樂團として記録に残つて居るものは大阪マンドリンオーケストラ、久留米の共鳴音樂會、神戸の關西學院マンドリンクラブ、臺北の柯丁丑氏の合奏團、京都の同志社マンドリンクラブ等であつて其中今日に残つて居るものは同志社、關西學院の二つは勿論として柯氏の合奏團が其名稱や主宰者を屢々變更しつゝ時々にはあるが演奏會を開いて居る。

大正八年に入つて斯界の發達は益々目醒ましさを加へた。シンフォニア、クレツシエンド、慶應、關西學院等の演奏會に加へて一時的な集りではあつたがメロデリア、マンドリンなる演奏會がレヂナルド・イーストレーキ氏によつて開かれた。そして此年の終りを飾るものとして田中常彦氏のタナカプレクトラムタキンテットが十二月二日演奏會を開いた。斯くの如き室内樂團の創立は斯界に大なる意義を與へるものであり、殊に曲目もよく選擇されたので將來の發展を望んだが惜しい事に一

回限りで途絶えた。

翌九年春、名古屋マンドリン俱樂部が慶應出身の林氏によつて組織され、又京都に河田武氏を首として京都マンドリン合奏團が興り、大阪にはムニエル・タキンテットなる純眞な五部團が創立された。

名古屋マンドリン俱樂部は今日も引續いて居る。京都合奏團は十年度に規模を縮めて四部團となり十一年頃までは演奏會をつゞけたが今では事實上衰滅したと見なければ成らない。ムニエルタキンテットは其後二三年間異常の努力をつゞけ又其第二マンドリン奏者たる横山傳一郎氏は十年度に於て本邦に初めてのマンドリン獨奏會を開いたが其後曲目の選定難其他で今は沈黙裡に入つて居る。

九年秋期に入つて神戸に「マンドリナータ・コメンゼ」なる新樂團が關西學院の福西、高梨氏等によつて組織された。そして當時東京以外としては最も立派な曲目を演奏會に示したものである。此團體も十一年度までつゞいたが其後は存否不明に成

つて居る。

シンフォニア、クレツシエンド、慶應等は春秋二期演奏會を開き、關西學院も秋期にコンサートを開催した。秋期に於てシンフォニアが武井氏の「母」を演奏したが、之は邦人の手に成るオーケストラ曲上演の嚆矢である。同時にプランツオリの「望まれし日」をも曲目に加へたが、其オーケストレーションは之亦本邦に於て最初の大規模なものであつた。

大正十年三月、シンフォニアは初めて「ギターの夕」を催した。然し之は失敗に終つた。武井氏のギター曲「野遊」、「タルレガに捧ぐる曲」、マンドラ曲「黄昏」が二月に出版された。邦人の作品刊行の初めである。

横濱に「ソチエタ・マンドリニステイカ・ドイ・ヨコハマ」なる新らしい合奏團が起つた。此團體は震災前まで續いたが、災害に倒れた。六月には横濱フィデリオ・マンドリン會なるものが演奏會を開いた。今日東京マンドリン俱樂部の名をもつもの

前身と見られるYMCAマンドリンクラブは此一二年引續いて演奏會を催して居た。

十年秋期に入つて慶應出身の松田氏を中心とする三越マンドリン俱樂部が十月に演奏會を開いた。此俱樂部は春期に於て既に演奏會を開いたらしいが明でない。

十月二十六、七兩日來朝のイアン・コバリスキーなるマンドリニストが獨奏會を開いた。技能は確かであるが、マンドリンの眞の生命は傳へられなかつた。それは彼が北歐の産だからであらう。

シンフォニアは秋期の第十二回演奏會を「ムニエル祭」としてムニエルの作品を以て曲目を編成し之に武井菅原兩氏合作の「ムニエルに捧ぐる曲」を發表した。宮田政夫氏の形成したヴェネツィア・マンドリン・クワルテットが矢張りムニエルの作品のみを以て演奏會を開き又他にもムニエルを紀念するコンサートを開いたものがあつた。ムニエル死して十年、彼は東洋のマンドリン愛好家の敬意を皆しく地下に享け

入れたであらう。

此他に横須賀三氏の民衆音楽普及會がドロホートフ、グリゴリエフ氏等を加へてマンドリン、バラライカ、改良三味線等の結合を主眼とする珍しい音楽會を開いた。

大正十一年春、東京プレクトラムソサエティーが第一回演奏會を開いた。同ソサエティーは御承知の通り今日も尙益々發展の道程にあり、且又後援會を有して、定期演奏會の外に例會と云ふ制度をもつて居るのは珍らしい。

「オルケストル・エトワール」「アニマ・マンドリン・クラブ」等の今日有數なる合奏團も創立は此頃である様に思はれる。

大阪に「イル・ドマーニ・マンドリーニ・オルケストラ」なる合奏團が興つたのは此前年であるらしく此年の初め第二回演奏會を開いて居る。此合奏團は其後「ドマーニ・オルケストリーナ・マンドリニスタイカ」と改名し合奏に於ては暫く演奏會を開

かないが石川俊二、川瀬晃の兩ギタリストを以て継続的ギターリサイタルを開きつゝある事は大方の御承知の通りである。

新に大阪醫大豫科のマンドリン俱樂部が起つた。又暫く絶えて居た同志社大學マンドリンクラブが再興の意氣込物凄く第一日試演會を開いた。五月九州大學のマンドリンオーケストラが久留米に演奏會を開いたが曲目は見るべきものがなかつた。六月に開いたシンフォニアの第十三回演奏會に於て本邦に初めてキタローネ、アルチキタルラの二低音樂器が加はつた。之が本邦に於て編成の完くなつた初めである。

慶應マンドリン俱樂部は此年に曲目の充實を期した。そして此時からは全然高踏的な好プログラムを公にし初めた。

十一年秋の新興樂團として東京に青山學院樂友會、熊本に第五高等學校マンドリン俱樂部、佐賀に高等學校マンドリンオーケストラ等が擧げられる。同年最終の企

として北海道大學のアウロラ・マンドリニ・オルケストラ主催の札幌學生聯合マンドリン大會がある。參加團體は小樽北海商業、札幌工業卒業生、小樽中學、札幌北海中學、北大アウロラの五團體に小樽シンフォニアがマンドラ獨奏として武井氏の「黄昏」を演奏した。尙此他札幌學生聯合で二曲、小樽中等學校學生音樂團が一曲を奏した。此企はコンコルソなど異つて居るが學生の親睦の上からも音樂向上の上からも珍らしい美しい舉である。

大正十二年初頭シンフォニア主催の下に本邦最初のマンドリン合奏團コンコルソが帝國ホテルに開かれた。參加團七、東京帝大、慶應、アニメ、東京プレクトラム、エトワールに横濱からソチエタマンドリニステイカ、京都から同志社の出場を見、課題曲はブラツコの「無言詞」、隨意曲は各自選定の下に孰れも接近した好成绩を示して結局京都同志社が優勝した。

此コンコルソは明に斯界發展の上に異常な貢獻をなした。此春に於ける各團體の演奏會が其結果を雄辨に物語つて居る。昨年度の曲目と本年のそれとの間の懸隔は全く著しいものであつた。

シンフォニアは第十五回演奏會に於て低音樂器アルチリウトを新に加へた。横濱マンドリン俱樂部が新に興つたが之は搖籃時の同名のそれと全く異なつたものである。又六月には慶應出身を中心として現學生をも交へた三田マンドリン俱樂部が興つた。此團體は非常に有力な演奏をなし得た。

斯くして春季は過ぎ正に秋季に入らんとする時彼の大震火災は關東を見舞つたのである。

横濱の團體は全滅した。東京ではシンフォニアが最大なる打撃をうけ次に東京プレクトラムがマンドローネ其他を焼く悲運に遭つた。然し其以外の團體が殆んど何等の損害をうけなかつたのは不幸中の幸である。

本オルケストラの樂器等を焼いた事は私達だけの不幸とあきらめられるが、此春

ボーン文庫を併せた武井文庫の焼失は斯界の爲に申譯なく思つて居る。デラゼー作ギター、スタウフェル作テルツギターを失つた事も残念であるが、然しラコート作ギターを残した事を以て満足しなれば成らない。

震災後十一月北海道大學の「チルコロ・マンドリニステイコ・アウロラ」主催の義捐演奏會、金澤の醫大、高工、四高聯合音樂會等が開かれ、又東京に於ては損害をうけた東京ブレクタラムが最初の演奏會を十一月に開き、十二月にはアニマ、エトワール等がコンサートを催した。京都帝大に新にマンドリンオーケストラが起つたのも十二月である。

斯くして不幸なる大正十二年は暮れた。

震災後十一月總會を開き、復興方針、會名變更、内部組織改善等を決した私達のオーケストラは全力を注いで復興に従事した結果、大正十三年、即ち本年度に入つて思ひの外之が進捗を見たので三月から再び雑誌を新に「マンドリンギター研究」と

命名して刊行した。

私達のオーケストラを除くすべての合奏團も不相變不斷の努力をつゞけて居る。而して其後に興つた合奏團として金澤アルベジヨ・マンドリン・ソサエテイ、京都府立醫大マンドリンクラブ、弘前マンドリン俱樂部、大連沙河口工場町のマンドリンクラブ、フランシスコ・マンドリンソサエテイ、桑名マンドリン俱樂部等がある。

而して六月には私達は初めて作曲コンコルソを企劃發表し、今や好成绩裡に終らんとして居り、震災の爲に延期されて居た第二回演奏コンコルソも將に開かれんとして居るのみならず、多年計畫して居た單行本は今讀者の前に現はれた。

思ふに本邦斯界は今後益々發達向上するであらう。唯すべての愛好家は一層協力して本邦斯界の爲に、又世界の斯界の爲に努力しなければ成らない。

本稿を終るに當り過去現在に於ける主要な事項を列記して一覽に供したい。

一、搖籃期以前

- マンドリン奏者として認めらるゝ最も古き人。四籠訥治氏
- マンドリン教授者。比留間賢八氏
- アデルスタインの來朝
- ギター奏者としての平岡氏

二、搖 籃 期

- 合奏を行ひたる初めと認められるもの。美術學校有志
- 今日に續く合奏團中の老齡者。慶應マンドリン俱樂部
- 合奏に對するサルコリ氏の功績
- マンドリニストとして最初にして且實力ある田中常彦氏
- 「マンドリンとギター」の刊行(シンフォニア)

三、勃 興 期

- 合奏曲目が獨創的價值あるものに入りたる初め(シンフォニア)
- 私的小冊子「合奏」の刊行(京都マンドリン合奏團)
- ムニエル祭(シンフォニア)
- マンドリン獨奏會(横山氏)
- ギター獨奏會の初め(シンフォニア)
- ギター獨奏の繼續的演奏會(ドマーニ)
- 邦人作曲公刊の嚆矢(シンフォニア)
- 邦人作合奏曲の公演の嚆矢(シンフォニア)
- 第一回演奏コンコルソ(シンフォニア主催)
- 第一回作曲コンコルソ(同上)
- 第二回演奏コンコルソ(同上)

○マンドリンオーケストラ樂器編成完了(シンフォニア)

○私的小冊子「プレクトラム」刊行(東京プレクトラム)

◎現在合奏團(順序不同)

○東京

オルケストラ・シンフォニカ・タケキ

慶應マンドリン俱樂部

三田同

東京プレクトラム・ソサエタイ

東京マンドリン協會

オルケストラ・エトワール

アニマ・マンドリン・クラブ

早稻田大學マンドリン部

オルケストラ・アルペジオ

東京高等工藝學校マンドリンクラブ

東京帝國大學マンドリン俱樂部

立教大學マンドリン俱樂部

法政大學同

明治大學同

フランシスコ・マンドリン・ソサエタイ

ニアポリタン・マンドリン・クラブ

慈惠會音樂部

○横濱

横濱マンドリン俱樂部

○名古屋

名古屋高商マンドリンクラブ

名古屋高工同

名古屋マンドリン倶楽部

○京都

同志社大學マンドリンクラブ

京都帝大マンドリンオーケストラ

京都府立醫大マンドリンクラブ

龍谷大學同

大谷大學同

○神戸

關西學院マンドリン倶楽部

神戸プレクトラムソサエタイ

神戸高商マンドリン倶楽部

○大阪

關西大學プレクトラムソサエタイ

ドマーニ・オルケストリーナ・マンドリニステイカ

○金澤

醫大マンドリン倶楽部

アルペジヨ・マンドリン・ソサエタイ

金澤高工校友會音樂部

四高マンドリン倶楽部

北辰會音樂部

○福岡

九大ファイルハーモニー會マンドリン部

○桑名

桑名マンドリン倶楽部

○會津若松

會津フイルハーモニックソサエティー

○弘前

弘前マンドリン倶楽部

○臺北

臺北ムニエルソサエティー

○札幌

チルコロマンドリニステイコ「アウロラ」

札幌北海中學マンドリン倶楽部

○小樽

小樽シンフォニア

小樽北海商業マンドリン倶楽部

小樽中學同

○函館

北方マンドリン倶楽部

○大連

沙河口工場内マンドリン倶楽部

○京城

京城マンドリン合奏團

○天津

天津マンドリン倶楽部

尙此他にも多く合奏團は存在するが其名を明瞭にしないものは省いた。各合奏團

は常に本オルケストラと連絡を保つて戴く事を御願ひする。